

2018
おもろ
チャレンジ

ナミビアでシロアリのフィールドワーク

農学部 3年

長塚 正一郎

ナミビア

2019年1月20日-

2019年2月12日



渡航概要と内容

今回の旅では、空路でナミビアに入り、いくつかの街をめぐってシロアリを探した。旅路では、シロアリ（主にアリ塚を作る種）の巣を探し可能な限り巣の中を見て、場合によっては捕獲した。町の発展具合は千差万別で、道路が日本と同じようにきれいに舗装されている町もあれば、そのほとんどが未舗装路の町もあった。シロアリは土がないと巣を作れないので、滞在した町の土地が舗装されている場合、巣を見つけるのが困難であった。そのような場合、郊外に出ないと巣を探すことができず、治安や交通手段の面で苦労することが多かった。一方、土地の多くがコンクリートで舗装されていない場合、街中のいたるところにシロアリの巣が見られ、容易に観察することができた。地域によって気候が異なり、国の中でもシロアリが分布している場所とそうでない場所があった。



図1 シロアリの巣の中



図2 コンクリートの上のアリ塚

渡航中に日本との文化の違いで苦労した点としては、主に三つあげられる。一つ目は、治安面である。やはり、日本とは異なって気を抜いたら物は盗られ、通る道を誤れば襲われる。そのため、常に周りを警戒する必要があつて多少ストレスフルであつた。また、親しくなつた現地の人たちに対しても、心を許しきれない時があり、もどかしい思いをした。しかし、ある程度の期間現地に滞在しているとそれが当たり前になり、また現地の人でも同じように襲われることを知つて、警戒するのがもはやその国での旅人のマナーなのではないかと思うようになった。二つ目は、衛生面である。渡航中、下痢や原因不明の蕁麻疹を発症した。常に口に入れるものの取捨選択をしなくてはならなかつたが、それも長い間滞在していれば特に気にならなかつた。三つめは、交通手段の遅れである。日本では、みな時間にシビアに動いていて、電車が数分遅れようものならちょっとした騒ぎになる。しかし、アフリカでは、時間にルーズであり、余裕を持った日程を組むことが必須であつた。今回の渡航では6時間遅れの電車もあつて、時間に関する文化の違いを痛感した。



図3 どこまでも続く一本道



図4 トランスナミブ鉄道

渡航中に起きたトラブルとして代表的なものは、交通・命に関するものである。上記のように交通機関は基本的に遅れるものなので、予定通りに目的地に着かない可能性が高く、宿を予約することもできないことが多かつた。時間通りにいくことを期待せず、何が起きても受け入れる心構えをし、むしろトラブルを楽しむことで、たいていのトラブルには対処できた。命に関するトラブルでは、他人に起きたことと自分の身に起きたことがある。友人が原因不明の高熱と嘔吐を発症したときには、現地の重病にかかつたのではないかと非常に心配した。自分の病気に関する無知と非常時を想定した準備が足りていなかったことを思い知つた。この際、自分には状況を打開する術がなかつたが、未来のことを無駄に心配して精神をすり減らすよりも、現実を見据え、冷静に状況を判断することが、より良い策なのではないかと思つた。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回の渡航で学んだことは数えればきりがなが、代表的なものを挙げたいと思う。まずは、今この瞬間を生きる大切さである。上記の友人が病気になつた話ではないが、不確定で自分ではどうすることもできない未来を心配して疲弊するくらいなら、過行く「今」という時間に集中す

ることの方がよほど大切だと学んだ。渡航中には偶然とは思えないような出会いや、再会が何度もあった。将来を打算的に捉えて、今日の前にいる人、直面していることに全神経を傾けないということは、なんと空しいことなのかと思った。今起きていることは、将来の出来事にどうつながるか分からないものであり、今この瞬間に全身全霊で向き合うことこそ、自分のあるべき姿なのだった。また、死というものを身近に感じる事が多く、今全力で生きることを意味を強く感じた。

ほかにも学んだこと、感じたことは無数にあるけれども、総じて自らの対人間関係についての気づきであり、帰国後に以前よりも他人との時間を楽しめるようになったのではと感じる。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の渡航はシロアリの観察を目的としていたが、それ以外の予想外の収穫がたくさんあった。学んだことの一部は上述の通りだが、ほかにも多くのことを感じ、学ぶことができ、チャレンジしてよかったと断言できる。

この渡航で、長い目で見てやりたいことが見つかったわけではないが、とにかく今を生きることの大切さを学んだので、ひたすら今自分がやりたいことに全力でぶつかることを誓った。将来、本当にやりたいことが定まっていなかったことに対する漠然とした不安はあるが、何が起るかわからないのが人生であり、またそれを楽しみたいというのが今の素直な気持ちである。

今回の渡航がなければ気づけなかったことはたくさんあるので、この経験を周りの人たちに共有して、少しでも多くの方が世界へ飛び出す手助けをし、自分もまたまだ見たことのない世界に挑戦したいと思う。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

迷っているなら応募したらいいと思います。自分が想像していること以上の学びがきっとあり、自分の価値観・世界が広がるのではないのでしょうか。

■ 主な奨学金の用途

- *渡航費、ビザ
- *宿泊費
- *食費
- *交通費・調査費
- *海外旅行保険、など

